

# 郷土らがさき



## 謹賀新年

令和三年元旦  
茅ヶ崎郷土会

### 第150号

発行 令和3年1月1日  
発行者 茅ヶ崎郷土会  
会長 平野文明  
編集責任 平野文明

ヨーカゾーとセイトの物語り	町田悦子……………2
論文『糸もつくるが人もつくる』紹介	平野文明……………5
小山敬三画伯を慕って小諸探訪	尾高忠昭……………9
資料紹介 腰掛神社の鳥居扁額	平野文明・米山東雄……………13
風(自由投稿欄)	長谷川由美・羽切信夫……………16
史跡文化財めぐり報告 二九八回中島	山本俊雄……………19

### 食い意地に任せ出かけるか、コロナを避けて蟄居できるか

コロナウイルスにくつつつかれないように家の中に蟄居しております。煩惱で満杯の私の頭の中は、そのために日々昂じる欲求不満で爆発寸前です。

私は辛いものが好きなのです。横浜のみなどみらい駅の真上に〇〇婆豆腐という本格四川料理の店があり、その麻婆豆腐は今まで食べた中で一番辛いです。これがまた、うまい。どんぶりが出てくるので、別にご飯も注文して一緒に食べないと口がしびれる。紹興酒をちびちびやりながら…。アー食べたい 食べたい

場所が移りましたが、茅ヶ崎に〇〇ゼリアというイタリアンがあります。年金生活の私にはびったりで、郷土会の一杯会で良く通いました。このワインが、また うまい。しかも一・五リ瓶で一〇〇〇円。エスカルゴを肴に赤と白をみんなでゴクゴク…。

アー飲みたい 飲みたい 飲みたい 飲みたい 飲みたい  
コロナに罹れば世間に迷惑を掛ける。しかし好きなものは我慢が出来ない。考えただけでよだれがたらたら。

行くべきか、行かざるべきか。それが問題なのです。  
ということ皆さん！ 今年も郷土会をよろしく！

茅ヶ崎郷土会々々長 平野文明

## ヨーカゾーとセイトの物語り

町田悦子



一ツ目小僧

民俗資料館（旧和岡家住宅）で  
ヨーカゾーの行事が再現されていたとき  
会場に置いてありました

十二月八日といえば、日本が太平洋戦争（第二次世界大戦）に突入した悪夢の日ですが、これとは別に、ヨーカゾーという俗信行事が行われてきた日でもあります。

ヨーカゾーとは聞き慣れない言葉です。「駅前ヨーカドのことですか」と聞き返されたことがあります。イトーヨーカド

ーは、浅草にある羊華堂洋品店に由来した店名です。でヨーカゾーとは全く関係がありません。「ヨーカゾー」というのは、毎年十二月八

日の夜に、額（ひたい）の赤い目をギラギラさせてやってくる妖怪、一ツ目小僧のことです。漢字で書くと「八日僧（ようかぞう）」の文字が当てはまります。八日僧の来る十二月八日を「ヨーカゾーの日」と呼ぶようになりました。

一ツ目小僧は、十二月八日の夜の暗闇に紛れて、村中の家を隈無く回り、戸締まりの甘い家に入ると、その家の人の一年間の悪事を調べ上げます。そして次の年、流行病であの世へ連れて行く人の名簿を作ると言われています。また、屋外に脱ぎ捨てられた履き物があると、悪い目印の焼き印を押していくと伝えられ、恐れられています。

しかし、この一ツ目小僧にもたったひとつ弱点がありました。目のたくさんあるものを極度に嫌い、絶対に近寄らなかつたのです。そこでこの日の夕方になると、村の家々では、脱ぎ捨ててある履き物を家の中に取り込んで整頓し、戸締まりを厳重にして早めに寝ます。一ツ目小僧の嫌う目（籠の編み目）のたくさんある蕎麦すくいを戸口にくくりつけたり、目籠（めかご）を竹竿の先に引っかけて軒先に立てかけておいたりもします。このようにして一ツ目小僧の退散を願う風習がごく最近まで茅ヶ崎にも受け継がれてきました。

この風習は、中国の仏教と儒教の故事に基づくものだったといわれています。「諸悪莫作（しよあくまくなき）もろもろの悪を

作すことなく) 衆善奉行(しゅうぜんぶぎよう もろもろの善を行い...)という仏の教えと、締まりの無い生活を論(きと)すために考え出された儒学的な戒めの行事であったようにも考えられます。



そばすくい  
茹でた蕎麦やうどんを  
すくいあげる

す。

しかし、一ツ目小僧もしたたかです。村人の隙を突いて悪事をしつかりと調べてしまいました。その悪事を記帳し終えろと、急用を思い出して辻の道祖神に立ち寄りま

す。そして、「俺は忙しいので、来年の一月十五日のセイト払いで預かってくれ」と、無理やりに帳面を預けて村を離れてしまいました。

さあ村人たちは、一ツ目小僧が記帳した悪事をあの世へ報告されたら大変です。道祖神が預かっている内になんとかしなければなりません。あれこれ算段の末、正月の十四日にセイト払いをすることになりました。

セイトとは神様の前で焚く火のことで、柴灯(さいとう)が転化してセイトと呼ばれるようになったと考えられています。



一ツ目小僧が嫌うという  
目籠(めかご)

茅ヶ崎のセイト払いのことは、平野会長が在任中に文化資料館の叢書1『茅ヶ崎の道祖神』の一〇三〜一一八頁に詳細にまとめられています。また、『茅ヶ崎市史』三の五六二頁にも記述がありますので、それらをゆっくりとご覧下さい。

道祖神は、土地によつて「塞の神」「障の神」「せい神」「せえの神」「みちの神」「岐(ふなど)の神」などと呼ばれています。集落の入口の分岐点に立ち、疫病や災禍の侵入を防いでくれる石神と信じられていました。病気になっても医者はいないし薬もない。薬があっても高価で手に入らない時代のことです。

す。村の入口で疫病の侵入を防いでくれていると信じられた道祖神は、現代医学のワクチンのような存在だったと思われる。このほかにも、行路の安全・良縁・出産・子ども健やかな成長・夫婦円満の神として村人の願いと向き合っておられます。

『茅ヶ崎市史』三の三八八頁には、茅ヶ崎市内に一〇三基の道祖神が八ヶヶ所にあることが調査、記録されています。

さて、セイトバライの次の日の十五日に、一ツ目小僧は預けておいた帳面を取りにやってきました。道祖神は、セイトの火で焼けてしまった帳面のことをどのように説明したのでしようか。セイトの灰の山を見て、悄然と立ち尽くす一ツ目小僧と、道祖神の言葉のやりとりを想像してみるのも一興があります。

コロナ禍が危ぶまれる昨今、人混みの敬遠からセイト払いの中止があちこちでささやかれています。しかし、ある村に、次のような気がかりになる言い伝えが残されています。

この話は弘化年間（江戸時代 一八四五〜四八）ころのことかもしれません。一月十四日に大雪が降って、セイトバライができなくなったことがあったそうです。その時にまじめな男の人が、たった一人でセイトバライをして団子を焼いて帰りました。ところがこの年にたまたま疱瘡の大流行が起こり、村中がバタバタと寝込んでしまいました。しかし不思議なことに、その男の人の家からは一人も病人が出なかったそうです。当時の疱瘡は、発疹が生じ高熱を発する死亡率の高い病気でした。コロナ感染拡大の今、背筋の伸びるような話です。

令和二年の一月十二日（日）に、市内香川の杉山会員にご一緒して頂き、大磯町のセイトバライのツアーに参加しました。

大磯ではセイトバライのことを「左義長」と呼び、国の無形重要文化財の指定を受けています。北浜海岸に、正月飾りを積み上げたセイトが九基立ち並び、ヤマトコマイリ（八所詣り）をしてきた私たちを待っていました。高さ一〇メートルもある円錐形のセイトには、書き初めや用済みになった達磨、神札がたくさん差し込まれて、吹き流しが風に舞っていました。この九基のセイトに火が点され、一斉に燃えさかる様は勇壮としかいようがありません。火の粉が飛び散る度にあちこちで悲鳴に近い声があがりました。厄を払い幸せをもたらす行事として、連綿と受け継がれてきたヤンナゴッコと呼ばれる、海方と陸方の綱引きも体験しました。

ヤンナゴッコとはセイトで火攻めにした疫病神の仮宮（かりみや）を、今度は海に引き入れて水攻めにするまつりです。砂に足を取られて何度も尻餅を搦きましたが全て暗闇の中です。波の音も叫び声も「ヨイサヨイサ」という太いかげ声にかき消され、いつの間にか私も綱を引っ張り続けていました。

左義長のまつりが終わり、二、三日経て、肩から胸にかけて筋肉痛を覚え、北浜海岸の綱引きを思い出す日が一週間くらい続きました。でもあの厄払いのお陰で一ツ目小僧のお迎えもなく、まるまる九〇歳の坂を越すことが出来たのだと、今も、本気でそう思っています。

## 名取龍彦氏著「糸もつくるが人もつくる」

— 教育者、社会教育家としての純水館主・小山房全 — 紹介

平野文明

## 一 はじめに

大正六年(一九一七)から昭和十二年(一九三七)まで、茅ヶ崎市内(現在の新興町一二、一三番地付近)に純水館という製糸工場があり、三百名近くの男工・女工を採用し、アメリカに輸出するために極めて上質の絹糸を生産していた。この会社の設立と経営に当たった人物は長野県出身の小山房全(ふさもち)。

工場が閉鎖されてから八〇年を越す年月が過ぎた。今、「純水館茅ヶ崎製糸所」のことをどれだけの人たちが知っているだろうか。もちろん、純水館のことは『茅ヶ崎市史』(2史料編・4通史編・5概説編・写真集茅ヶ崎きのうきょう)に記述されている。私は寡聞にして知らないが、これらを除くと関係する文献は多くはないのではなからうか。

この程、純水館と小山房全について調査し、文章化した論文が作成された。その筆者は名取龍彦さん。文章化されたといっても冊子にはなっていないで、データファイルは筆者のパソコンの中にあり、私はそのプリントアウト版を頂いて拝読したのである。執筆時期は、「初回原稿」(ここでは「論文1」とする)に「二〇二〇年六月二十九日記」、「追加原稿」(「論文2」とする)に「同年九月三十日記」と記載されている。A4の用紙に印刷して、論

文1は九一頁、論文2は一八頁あり、大論文である。

前記したように二部構成になっている。論文2は「論文1が完成した後に入手した資料とその考察」と記されている。

実によく調べてあり、的確な文章で記されている。挿入されている画像や資料のレイアウトもうまく配置してある。そして、小山房全と純水館茅ヶ崎製糸所に関する新しい知見に満ちている。

論文はまだ公開されてはいないが、筆者の承諾を得てここにその内容を紹介しようと思う。このすばらしい論文に瞠目したからである。

## 二 論文の表題

表題「糸もつくるが人もつくる」は、大正十三年(一九二四)六月十五日の横浜貿易新報(神奈川新聞の前身)の記事、「純水館の近況 糸も造るが人間も造る」(論文1の四二頁)から取られている。同日の記事の内容は次のとおりである。

「小山房全氏は頗る好学家にて社会時事に関する新刊書は常に之を求め図書室へ供えて読ませている 要するに館長(平野注房全のこと)は男工、女工に対しては給料授受の関係を去り自己の子女を以て目し『人間を造る事』を目的としているので

…

寄宿舎に住まう工員たちに対して、平塚キリスト教会水野牧師、東京成蹊学園小松松次郎、鉄道青年会布教師神谷徳倫を呼んで講演を依頼し、八〇余の雑誌、一〇余種の新聞を備えて修学意欲に備え、男工に対しては小学校卒業から養成し、さらに補習学校を設けて中等教育を授け、また野球・庭球等の運動をすすめていることを報じたものである。

この記事によって、経営者小山房全が、製糸事業を行いつつ、従業者たちに手厚く教育の機会を与えていることを知ることが出来る。筆者 名取さんは、小山房全のこの教育者の側面に光をあてて論文をまとめているのである。

このことはこの論文の特徴の一つである。今までの研究では主に産業としての純水館がとらえられていたが、筆者はそれに加えて、小山房全その人にも視点を当て、特に彼の教育者としての側面を明らかにしている。強調しておきたい点である。

### 三 論文の章立てと内容

論文が二部構成になっていることは先に記した。論文1の冒頭に章立てが記されていて目次を兼ねている。この章立てをたどることによって、論文1にどのような事柄が記されているかを紹介しよう。

八章ある章の内容を残らず紹介することはできない。私が注目したことを転記するだけである。もとより純水館についてほとんど何も知らなくして論文を読んだので、用語の間違いや、誤読の箇所があることだろうが、それはご容赦願いたい。

論文1の各章とその概略は次のとおりである。

**1 はじめに** 純水館茅ヶ崎製糸所の説明と執筆の目的

**2 房全が生きた時代の蚕糸業** 大正期から昭和初期の蚕糸業と時代背景

**3 房全の純水館経営** 純水館経営と時代背景

**4 小山家 義父 小山久左衛門と小諸純水館** 信州小諸の豪商小山久左衛門が、養子 房全の社会教育活動に及ぼした影響

**5 実父・工藤善助と依田社(よたしや)** 信州丸子の製糸業者 工藤善助が房全の社会教育活動に及ぼした影響

**6 房全と後藤新平の「学俗接近」** 後藤新平の学俗接近の考えが房全に及ぼした影響

**7 横浜貿易新報の記事で追う房全の実践** 房全の茅ヶ崎での社会教育活動の具体例

**8 おわりに** まとめと課題

明治から大正初期に掛けて絹糸は輸出産業の花形商品であった。小山房全は純水館茅ヶ崎製糸所の館長(社長)を大正六年の創業時から五三歳で死亡した昭和十年まで務めた。純水館の絹糸が優れていたことは、①皇太子だった昭和天皇のご成婚に際して全国から献納された繭を茅ヶ崎純水館が繰糸(そうし)した、②昭和三年の昭和天皇の御大典のときにも純水館の絹糸も献上された、③御法川式多条繰糸機(みのりかわしき)を用いた、④御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑤御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑥御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑦御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑧御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑨御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑩御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑪御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑫御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑬御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑭御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑮御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑯御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑰御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑱御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑲御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、⑳御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉑御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉒御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉓御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉔御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉕御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉖御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉗御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉘御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉙御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉚御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉛御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉜御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉝御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉞御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㉟御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊱御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊲御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊳御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊴御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊵御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊶御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊷御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊸御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊹御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊺御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊻御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊼御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊽御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊾御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、㊿御法川式多糸繰糸機(みのりかわしき)を用いた、

茅ヶ崎純水館が創設される前、大正三年から小諸純水館が茅ヶ崎で繭の買入れを始めている。その後茅ヶ崎に一万二千坪の用地を確保し、大正六年二月五日から茅ヶ崎純水館は繰糸を始め

た。房全と茅ヶ崎の出会いには、「明治四十年頃に南湖院で入院治療」(二二頁)を受けたことが始まりとある。

創業以来好調な経営を続けていたが、大正十二年の関東大震災で工場が全壊し、妻喜代野を失う。その後の世界恐慌期を経る中で次第に負債を抱えていく。昭和十年四月房全は病に伏し、五月には操業を一時停止し(後に再開)、九月十五日逝去する。昭和十二年、純水館茅ヶ崎製糸所は閉鎖、廃業する。

小山久左衛門は現小諸市の実業家で、家業は醸造業だったが、明治二十三年に製糸場純水館(小諸純水館)を創立した。八人の子どものうち、長女の喜代野は房全と結婚し、長男の邦太郎は家督を継ぎ、三男は画家で茅ヶ崎に住んだ敬三である。木村熊二の小諸義塾(明治二十六年創立)創設を支援した。小諸義塾は明治三十二年に私立学校となり島崎藤村も教師として着任した。小諸義塾を支援したように教育活動にも熱心で、その姿勢は房全に大きな影響を与えた。

房全の実父 工藤善助は現在の上田市で衆議院議員にもなり政治家として活躍し、また明治二十年(一八八七)に依田社という茅ヶ崎純水館より規模の大きい製糸会社を創立した。房全は善助の次男である。善助も教育には熱心で、工場内での特別教育、女子や幼年労働者の労働環境の改善、依田窪教育会への支援などを行っている。これらが房全の茅ヶ崎での教育活動に大きく影響している。

房全の社会教育活動には後藤新平の思想が影響している。後藤は、学者と世俗の接近を説く「学俗接近」論を持論とし、その実現をはかり、「通俗大学会」を組織した。大正五年(一九一六)に小諸、長野、松本、諏方を巡回し「通俗大学会」の設立を熱心

に説いている。その結果、長野県下各地に「夏期大学」が実施された。

一方、茅ヶ崎では大正十三年(一九二四)八月一日から同月八日まで、茅ヶ崎小学校を会場にして「高座郡教育会主催夏期自由大学」が開かれる。筆者は、この茅ヶ崎の「夏期自由大学」と、後藤が関係する「夏期大学」、長野県下で行われていた「自由大学」とを7章で比較し考察している。

房全と後藤との付き合いは、大正十三年(一九二四)六月の後藤の純水館訪問、翌年に純水館に「上善為水」の扁額を贈ったこと、同年五月に純水館食堂で講演したことなどで知る事ができる(三一頁)。筆者は、「房全は」特に後藤を模範、理想とし、後藤の学俗接近、紳士税の思想的影響を強く受けていると推察する(三三五頁)と述べている。

7章には、房全の教育活動が詳細に紹介されている。この論文の中心部分といっても良いだろう。具体的には次の四点が取り上げられている。

一点目、大正十二年(一九二三)三月に東京府立第五中学校長伊藤長七の講演会が茅ヶ崎小学校で行われたこと。

伊藤長七について筆者は各種の資料を引きながら、「伊藤の茅ヶ崎での講演会は小山家とのつながりで実現した。房全が敬愛する後藤新平と行動を共にする伊藤の教育思想と実践は、房全の社会教育事業に大きく影響していると考えられる」と記している。

二点目は「男工女工の工場内での教育」で、その概要は先に「二 論文の表題」のところ述べた。

三点目は、高座郡教育会主催の「高座郡夏期自由大学」の考察である。茅ヶ崎で行われたこの事業は「自由大学」とも「夏期大

学」とも呼ばれて、大正十三年八月に一回だけ行われた。一方、茅ヶ崎以外では後藤新平が提唱する「夏期大学」と、長野県下に行われていた「自由大学」があった。茅ヶ崎での事業は二とおりと呼ばれ方をしているが、『自由大学』と『夏期大学』を使い分けたのではなく、『大学』と称する教育を一般市民が受講できる機会と捉え、(平野注―茅ヶ崎では)混用していたのかも知れない、『高座郡夏期自由大学』は『(長野県下の)自由大学』ではなく、『(後藤新平の)夏期大学』に近く、『夏期大学』の変則的な開講であったと考えるのがよいだろう。(五九頁)と筆者は述べている。さらに「房全が関わったからこそ実現した『夏期大学』だったと考える」とも述べている。

茅ヶ崎のこの「大学」に沼田頼輔が講師として招聘されている。沼田の演題には触れられていないが、前年の関東大震災で出現した旧相模川橋脚について語ったと、私は何かで読んだような気がする。昭和三年十月の日付の『史蹟名勝天然記念物』第二集第十号に掲載されている沼田の「神奈川県茅ヶ崎出現の古橋脚」は、この「大学」の時の講演を文章化したものと思われる。

四点目は、「知友会」主催で大正十四年五月に行われた後藤新平講演会である。「知友会は別荘人との町民の親睦団体」であり、房全がいろんな団体とも関わって進める社会教育活動の一例としている。また筆者は次のように記している。「知友会は『茅ヶ崎市史』では発足が大正十三年で、会員数を七十二名位と推定しているが、『横浜貿易新報』によれば、発会は大正十四年一月十八日で、会員数は一五〇名となる」。筆者の細かな探索が、新しいデータを発見しているのである。

最終章の8章では、茅ヶ崎町長新田信、実父工藤善助、養父小

山久左衛門のこと、及び「課題」について述べてある。

大正六年に茅ヶ崎純水館を創業した小山房全、大正十年から町政についた新田信は年齢も近く、活動の時期が重なっている。革新的会社運営をめざし、工場内教育及び社会一般で行われる社会教育の必要性を感じている房全と、地方自治の推進とその基礎となる教育の普及に力を注ぐ新田には似たところがあると筆者は強調している。

房全を支えた人びとのさらなる調査・研究と、今後はインターネットから得る資料が増えるだろうという予測のもと、ネット情報をどのように扱うかという点を課題として論文1は終わっている。

#### 四 資料の扱いと「論文2」の内容

筆者はたくさん資料を使っている。刊行された文献や独自に集めた各種の資料を詳しく紹介している。

中心になつていいる資料は「横浜貿易新報」である。明治二十三年に創刊され、昭和十七年に「神奈川新聞」と名を変えた。「関東・中部地方の蚕糸業関係者を主な購読者とする業界関係誌」と七十二頁の注1に筆者は説明している。「茅ヶ崎純水館に関する記事も相当数ある」そうである。この貿易新報から茅ヶ崎純水館に関する記事を抜き出して、そこに記されている事柄、人物等々を調べていく。その作業の過程で、さらに他の資料を集め参照する。一連の資料には番号が振られていて、論文1ではその数が五〇に及んでいる。また、本文に紐付けられた注釈は一四一項目あり、それを列記した頁数は一九頁に及ぶ。

論文2は、論文1を執筆した後に集めた資料と考察である。次



の五項目が取り上げてある。

#### 一 純水館の繰糸技術の高さを示す資料について

純水館製の絹糸がアメリカのチニー社の検査で上質と判定されたことを示す文献と、その上質糸を紡いだ御法川式多条繰糸機を説明した資料の紹介。

#### 二 房全の論文について

房全の論文、「蚕糸業経営合理化に関する私見」の紹介。

#### 三 男工女工の工場内の教育について

『房全追憶録』（房全の死後に編集された）に寄稿している盈進学園（えいしんがくえん）の丸山鋭雄（としお）と、純水館工場内で裁縫講習会を行っていた平塚高等家政女学校の上原とめについての追加資料の紹介。

#### 四 「社会教育家・房全」を明らかにする資料

茅ヶ崎小学校の二宮尊徳の像建立に房全が関係しているらしいこと、横浜貿易新報にある全二六巻の高価な二宮尊徳全集を茅ヶ崎図書館に寄贈した記事（房全は本全集を、茅ヶ崎・鶴嶺・松林の

三小学校にも寄贈している）、「純水館会議室で教育座談会」が行われた記事、房全が行った教育関係の寄附行為記事の紹介。

#### 五 横浜貿易新報の記事について

工場が創業を始めた大正六年から房全が死亡した昭和十年まで同紙に掲載された房全と純水館に関する記事は一〇三項あるそうである。欠けていて見ることができなかった紙面もあるようだが、これらの記事を年ごと月ごとの一覧表にしてある。著者は「一〇三個もの多数の記事は純水館の歴史を調査・研究するうえで貴重な情報提供資料である」と記している。

この論文を足がかりにして、茅ヶ崎の養蚕業、製糸業の歴史に目を向ける人びとがあらわれることと思う。すでに茅ヶ崎純水館の故郷、信州小諸へ探訪旅行を実施した郷土会々員もおられるのである。  
(二〇二〇年十二月六日記)

### 小山敬三画伯を慕って小諸探訪

尾高忠昭

新型コロナウイルス感染拡大のさなかだが、外出制限などが発令される前に、さらには雪の降る前に、G。T。トラベルの

体験かたわら、同行三人、秋深い信州小諸に小山敬三画伯の面影を尋ねました。



子供の頃、小山別荘と呼んでいた周囲の大人が言っていたアトリエは、木製の堅枠の門からうねって奥へ続く、きれいに掃かれた小道の奥に、たくさんの松に囲まれた大きな屋根の西洋館だったとしか憶えていません。たまに松林の奥に、色の白いスラックとした洋装の外国人婦人を見つけても、目をそらし慌てて走って帰って来てしまった記憶があります。

小諸に着いたら先ず蕎麦と、懐古園入り口近くの「草笛」にて名物くるみ蕎麦を手練りました(美味だが量が多いので注意)。

懐古園最奥に近い千曲川を見渡せる場所にある、昭和四十二年(一九六七)に文化勲章を受章された村野藤吾さん設計の瀟洒な小諸市立小山敬三美術館を訪ねました。この美術館は、画伯が文化勲章受賞された昭和五十年(一九七五)に建設され、作品と共に小諸市に寄贈されたものであり、昭和五十二年(一九七七)には村野さん設計のこの建物が毎日芸術賞に選ばれています。

文化勲章と言えば、画伯は受賞五年前の昭和四十五年(一九七〇)に文化功労者として顕彰され、その翌年に小諸市名誉市民に推挙されています。片や茅ヶ崎市では、名誉市民をお願いしたのは文化勲章受賞の翌年の昭和五十一年(一九七六)で、遅きに失したとはこの事です。

美術館の第二展示室では、大正六年(一九一七)とフランスから帰って昭和九年(一九三四)の春秋の、二度にわたって渡航した中国の風景画が企画展示され、第一展示室には、画伯の「初夏の白鷺城などの城シリーズ」「浅間山シリーズ」など代表作が常設展示され画伯の神髄に触れる事が出来ました。

美術館に隣接して、平成十四年(二〇〇二)、画伯の没後十五年に茅ヶ崎南湖にあったアトリエと住まいの一部を、ご遺族の中島蓉子氏が移築して小諸市に寄贈した、今回の私の旅のお目当ての小諸市立小山敬三記念館がありました。しかし残念ながらシーズンオフのため閉館中で、アトリエの内部には入ることができませんでした。外観は色々と撮影できました。来年の夏には是非再訪し、アトリエ内を拝観し、茅ヶ崎の家の松林を描いた大作「松苑」を鑑賞したいと思っています。

私子供の頃、「小山さんは夏は此処を留守にして軽井沢の別荘暮らし」と聞いていて、茅ヶ崎が別荘暮らしのはずなのに、別の別荘に?、と不思議に思っていました。今回、美術館で購入



移築保存されている  
小諸義塾の建物

2020/11/25 16:33

した書籍『気韻生動の画家 小山敬三の世界』に、戦後すぐに軽井沢に別荘を入手し秋まで過ごされた日常が綴っており、南湖が本宅、軽井沢が別荘と改めて納得しました。

今回の旅は文学散歩ではないので、懐古園の中にある藤村記念館は遠慮して、懐古園外にある、島崎藤村が六年間教師を務めた（館内の説明板）小諸義塾の建物を移築復元した小諸義塾記念館に向かいました。画伯の父の小山久左衛門正友のことと、その小山家と義塾の塾長木村熊二との関係を調べられたらと思ったからです。小諸義塾と木村熊二については大いに参考になりましたが、藤村記念館を省いたのは大きな失敗で、来夏再訪の折の宿題になりました。画伯が日本経済新聞の昭和四十四年（一九六九）六月二十三日に寄稿された「師

島崎藤村」他の文章で、大いに島崎藤村の教えを語っているのを知ったからです。

その日の泊りはベッド希望という事で懐古園近くの小諸グランドキャッスルホテルを予約しました（ビュッフェの食事二食付きで約一万円）。

このホテルが伊東園ホテルズグループ入りしたので期待していませんでしたが、ビュッフェでの食事取り分けには使い捨て手袋が用意されていたり、宿泊者も少ないせいか距



小山家と穀物蔵

2020/11/27 11:13

るルールでした。

GO TOトラベルの宿泊料は一万円×三人＝三万円×六五％＝一万九千五百円となり、差額の一万五千円は国土交通省が補填します。結局は国民の税金か国債という将来の借金での肩代わりです。

翌日は画伯の父 小山久左衛門正友が明治二十三年（一八九〇）に創業し、長兄 邦太郎が継承経営した小諸純水館の跡を巡りました。創業した小諸市諸（もろ）にある弁天の清水、同市六供の純水館丸純工場事務所、そこを見下ろす丘に平成十年に建立され

離を置いて食卓が配置されていたり、感染対策に苦勞されていたのが良く分かりました。

何より感動したお得感は、アルコールは飲み放題だったことと、並べてある一升瓶のラベルを見ると信州地酒の名の売れている銘柄揃いで、特に木曾の七笑があるのには吃驚しました。ジョッキや杯は飲む度に取り換えて接触感染を避け

た純水館記念碑、紺屋町にある大正六年(一九一七)創業の佐久蚕種株式会社(蚕種蔵、そのすぐ下にある海蔵院墓地の小山家墓地(門扉で囲まれている)を見学しました。

昼飯の蕎麦は本町の端にある「そば蔵丁子庵」のきのこおろし蕎麦を頂きました。蕎麦も汁も満足、蕎麦粉で出来たおやきを土産にしました。

二日目の宿は市街からチェリーパークラインを三〇分上った、雲海が名物の標高二〇〇〇峰の高峰高原ホテルでした。さいわい天候に恵まれ、雪も降らず凍結の恐れも無さそうで、フロントのラウンジや部屋の窓からは、八ヶ岳をはじめ中央アルプス、南アルプスの山容、さらに富士のシルエットも拝めました。夕食はフレンチ風のコースでしたが、ここも量の多さが老人向きで無く、山登りの若者の宿だと納得し一生懸命食べました。

翌朝は、看板どおりに麓から足元まで雲海に覆われた奇観を見て、寒さの中の雲海見物の散歩を楽しみました。

最終日は、山をおりたのち、千曲川の対岸に氷風穴(こおりふうけつ)を訪ねました。風穴は明治、大正の蚕糸業の最盛期に、蚕の卵を冷蔵保存(蚕種貯蔵)するのに用いられ、特に小諸は全国有数の風穴が稼働していたそうです。氷集落(風穴のある集落の名)の老人の話では、暑い夏場に来てみれば押し返してくる程の冷気を感じられるそうで、今でも酒や漬物などを保管貯蔵しているとの表示もありました。

その後、江戸時代後期の商家の作りが連なる本町通りを散策して、通り中程の「そば七」で、店自慢の石臼曳きの手打ち蕎麦を頂きました。蕎麦には太い細いがありました。細い方が私の喉には馴染みませんでした。

小諸探訪のメは小山敬三画伯の生家であり、小諸純水館を創設した小山久左衛門家 酢久商店(すきゆうしょうてん)を荒町に尋ねました。系列の信州味噌社長(森さん)が待ち構えていて、隣地のお住まいも案内してくださいました。穀物蔵の隣の蔵が画伯の画室であったとのことで、私の目の前に当時の建物がそのまま現存している文化にも驚きました。

二泊目のG。T。トラベルの精算は、二食付き宿泊費一万七六〇〇円×三人＝五万二八〇〇円×六五%＝三万四三二〇円(一万八四八〇円は国土交通省払い)、地域共通クーポン分七九二〇円は千円のクーポン六枚に化け、昼の蕎麦と土産に効率良く使ってこの旅を終えました。

おわり



現在の酢久商店

## 資料紹介

## 芹沢 腰掛神社の鳥居扁額

芹沢の鎮守、腰掛神社には境内入り口に二基の鳥居が重なって立っている。境内の外側は石造の神明(しんめい)鳥居、内側(社殿側)は木造の明神(みょうじん)鳥居である。前者には、向かって右側の柱下部の根巻右裏側に「大正拾五年／五月九日建之／奉納者／米山八造／全ヤノ」(大正十五年は一九二六年)、向かって左柱の同所に「当社氏子／助力」と彫ってある。

ここに紹介する扁額は後者の木製鳥居に架かっていた。この鳥居は明神鳥居の形をしているが、左右の柱にはそれぞれ二本ずつ添え柱があり両部(りょうぶ)鳥居になっている。さらに、柱が島木(しまぎ)に接する部分に台輪(だいわ)があり、笠置(かさぎ)には屋根を被せてある。この形で額束(がくづか)がなければ宇佐鳥居というそうである(吉川弘文館『國史大辭典』)。

令和二年(二〇二〇)五月十七日、この扁額の修繕のために下ろしたところ、正面には「腰掛神社」と、裏面に文字が八行にわたり彫りつけてあった。刻字の解説に協力を頂いた地元の人びとの名前と教示内容を付して次に記しておく。丸数字は行数であ



手前が石造の神明鳥居(大正15年建造)  
奥が木造の明神鳥居(昭和10年建造)  
朱線で囲った扁額は明神鳥居に架かっている。

2006年撮影

平野文明

米山東雄(腰掛神社総代)

る。

昭和拾年 中秋

秋津「卯」之助

常盤作「治」

常盤直「吉」

官幣大社宇佐神宮宮司

常盤豊造

秋津「春吉」

(この行、文字がなく一行分空いている)

源朝臣秀「雄」謹書

塩川「善司」

平本「衛」

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧

①行 「卯」は読めなかったが秋津清氏の教示による。

②行 「治」は常盤良夫氏の教示による。

③行 「吉」は常盤清治氏の教示による。

④行 読めない文字は無かった。

⑤行 「春吉」は秋津清氏の教示による。

⑥行 この行、文字がなく一行分空いている。

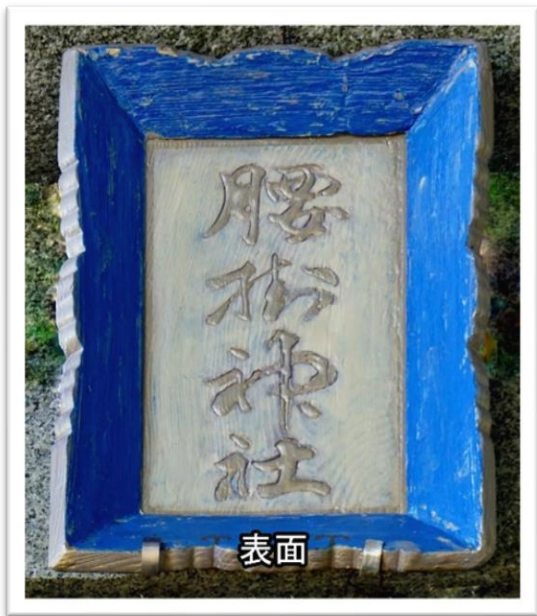
⑦行 「雄」は宇佐神宮、「善司」は塩川十善氏の教示による。

⑧行 平本豊治氏によれば、平本姓に「衛」の付く名の人はない

ったとのこと。「衛」ではない可能性がある。

扁額裏の刻字は上下二段に分かれている。上段は紀年銘と揮毫者名、下段は七人の名前である。

紀年銘は「昭和拾年 中秋」とある。「仲秋」ならば太陽太陰暦で八月、「中秋」は同暦で八月十五日を指す。よって扁額にある日付は昭和十年(一九三五)八月十五日となる。鳥居に建立の



表面



裏面

期日が書かれていないが、扁額の紀年銘の時と大きな違いはないだろう。

上段にある

「官幣大社宇佐神宮宮司／源朝臣英雄謹書」

は、初め「雄」が読めなかった。

そこで、令和二年五月十九日、大分県宇佐市南宇佐二八五

九の宇佐神宮に問い合わせたところ、昭和八年

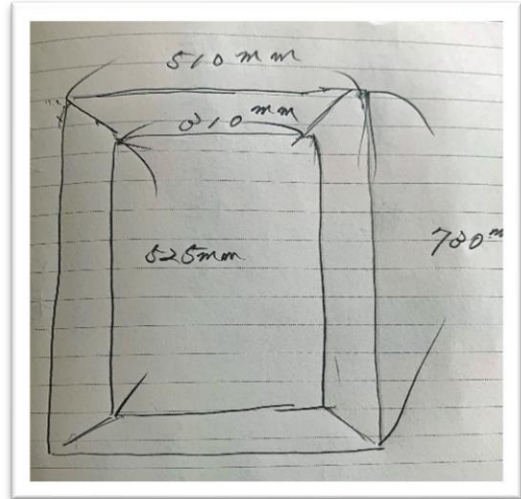
(一九三三)から同二十三年

(一九四八)間の宮司は「横山

英雄」であることが分かった。

さらに、同年

七月二十四日付で、腰掛神社総代米山東雄から宇佐神宮へ、文書



で「どのような経緯で扁額の書を依頼したのか、当時の神社からも同様の依頼があったのか」を照会した。このことに関して同年八月十五日付で、宇佐神宮宮司 小野崇之氏から返答があり、宇佐神宮宝物館の調査結果が添付されていた。調査結果の要旨は次のとおりであった。

①昭和十年の、一年間の神社社務日誌などを検索したが、

関係する記載は見つからなかった。

②横山英雄氏は昭和八年から同二十三年の間、官幣大社宇佐神宮、戦後は宗教法人宇佐神宮宮司を務めた官選宮司で、昭和十六年（一九四一）の復興大造営実施の功績を残している。

③昭和十年前後の宇佐神宮は、国内はもちろん、満州や朝鮮台湾まで崇敬を集め、資料要請や講演依頼、別府湾入港の軍艦乗務員の集団参拝などが社務日記に記載されている。また、同十年は十年に一度の勅祭（勅使奉幣祭）の年で、この準備や打合せで宮司の上京、出張が数多く行われている。

④関係資料をできる限り検索したが、腰掛神社のこと、扁額揮毫依頼のことは発見できなかった。よって「横山宮司の）個人的な関係性で扁額の揮毫を依頼されたのではないか。」

さらに「御参考」として、『神道人名辞典』（神社新報社 昭和六十一年刊）から引用した横山英雄の記載が付されていた。記載

は次のとおりである。

横山英雄（よこやまひでお） 大分県・元宇佐神宮宮司。神奈川県出身。明治二十四年（昭和二十三年十一月二十六日。略歴）大正三年神宮皇学館本科卒、八年神奈川県・鎌倉宮禰瓦、十年和歌山県・熊野座神社宮司、十五年宮崎神宮宮司、皇典講究所宮崎県分所長、昭和八年大分県・宇佐神宮宮司。二十一年神社本庁理事、同年大分県神社庁長、二十三年宇佐神宮宮司現職中死去。

腰掛神社は江戸時代の芹沢村の鎮守であるが、扁額下段にある七人の人名は神社近くに住まいする人たちで、芹沢全体に及ぶものではない。奉納者と思われるが、奉納は扁額だけだったのか、鳥居全体の奉納だったのかは不明である。②行目「常盤作治」と④行目「常盤豊造」は兄弟で、作治は戸塚に転居していたそうである。

扁額の揮毫を横山英雄に依頼した経緯も不明であるが、大正十五年に石造の鳥居が建造されているのに、昭和十年に木造の明神鳥居を追加建造した理由も不明である。大正十五年に建てた石造の鳥居が神明鳥居であるのは、神社の祭神が日本武尊（やまとたけるのみこと）だからだが、木造鳥居は、先にも記したように、笠置に屋根を掛けた宇佐鳥居になっている。この屋根は後補の可能性もない訳ではないが、扁額の揮毫を宇佐神宮の宮司に依頼していることと関係があるのかも知れない。

以上、解決できない課題も残るが、修繕に伴う実見から浮かび上がった諸点を記して置く。

（二〇二〇年十二月十四日）

風  
自由投稿欄

オンライン文化祭への挑戦

長谷川由美

茅ヶ崎郷土会の会員  
茅ヶ崎市文化団体協議会事務局長

「一年の計は元旦にあり」

今年は、計が立てられる年になりますように…

いえいえ、いろんなハードルが出てきても、工夫して軽々と飛び越えたいものです。

みなさまご存知の通り、二〇二〇年度の茅ヶ崎市民文化祭は、コロナ禍のためにオンライン配信がメインの開催となりました。

茅ヶ崎郷土会の写真展は、会場が市役所一階で、換気が良いため開催ができました。そして、「オンライン やろー!」と身軽にハードルを飛び越えて、平野会長、杉山副会長、山本理事の解付きでインターネットで配信されていますね。

ご自宅で過ごされている方も、介護施設などで家族に会えない方にも、遠くのお孫さんをはじめ、インターネットに詳しい若い人たちにも見てもらうことができます。

オンライン文化

祭が決まるまでも

紆余曲折がありました。

まず、「例

年通りの文化祭

は、人が集まるの

で開催困難」の連

絡が市役所から入

り、時期をずらし

て「合同文化祭

」を企画しました

が、夏を超えるこ

ろ、「合同でも開

催困難」の再度連

絡。「ではでき

ることは何ですか？

できることを探し

ましょう」となり

ました。各部会の

皆様に検討を願

いし、「オンライ

ンで開催可能」に踏み切りました。

三曲、音楽、映像演劇、祭囃

子の舞台の収録。工芸造形展撮影がこれからです。

また、オンラインで開催される短歌大会では、ホノルルでも募

集をかけました。これまで交流書道展でお世話になった書道の先

生が、日系新聞に募集記事を載せてくださったり、神奈川県人会



茅ヶ崎郷土会 動画で撮影の様子



の会長さんが協力してくださいました。コロナ禍でホノルルも大変な状況です。でも、久しぶりに出したメールを、暖かくウエルカムで迎えてくださったのです。

こんな時だけど、こんな時だからこそ、オンラインが注目を浴び、世界と繋がることも容易になりました。

世界が広いのか、狭くなったのか?? インターネットを使わない方にも、公共施設で講演会や録画を見ていただけるようになると思います。

市民文化祭も厳しい状況になって行くでしょう。けれど、文化は絶えない。絶やささない。ハードルを超えていきましょう。今年もよろしくお願いいたします。

【編集者注記】収録した動画はYouTube(ユーチューブ)で配信中です。「茅ヶ崎市 市民文化祭」などで検索すると見ることができます。茅ヶ崎市のホームページからも入れます。

### 自動車免許更新せず

#### 自動車から電動アシスト自転車へ

羽切信夫

私は昨年十一月、満九二歳の高齢者になりました。昭和四十四年(一九六九)八月、満四〇歳で中型運転免許証を取得しました。取得年齢が遅かったのは、当時、国鉄東京駅に勤



私の活動を支えてくれた愛車

務し、労働組合運動に参加していて、国鉄無料パスがあり自動車の必要性がなかったからです。

私は昭和四十六年(一九七二)四月の統一地方選挙で茅ヶ崎市議会議員に立候補する事になり、事前運動で地域活動をするため

自動車運転が必要となり、免許証を取得することになりました。

当時の東京駅は職員が一〇五〇人で、駅長を含め約五〇人が管理者、国鉄労働組合員は約一〇〇〇〇人でした。国鉄労働組合東京駅分会書記長の「国鉄職員といえども社会的な活動をするには自動車の運転は不可欠である」との考えから、埼玉県大宮市の自動車教習所長と親しかったので、組合員に対して、団体割引で値段の安い教習料金での免許証の取得を勧めておりました。約二〇〇人の組合員が免許取得のために参加しました。多くの教習生を送ったので、埼玉県警OBの教習所長がお礼のために書記長を大宮市内の料亭に招待しました。書記長が「組合として取得運動を行っているので、委員長も招待して欲しい」と申し入れると、気持ちよく私も招待してくれましたので出向いて御馳走になりました。

その席上で教習所長から「選挙に立候補するならば自分で運転できることが好都合である。特別に教えるから」と熱心に勧誘されました。

当時の私は、国労新橋支部の専従役員から東京駅に復職し、改札の職場で一昼夜交替勤務の改札や案内業務についていました。国鉄当局は機械化や合理化運動を強引に進めており、東京駅では全国に先駆けて自動販売機と自動精算機の導入問題が提案され、連日、東京鉄道管理局との団体交渉が続いていました。そのために、交渉委員で委員長だった私は勤務を免除されていました。いわゆる「闇専従」でした。

この団体交渉の間を縫って大宮教習所に通いました。一般の教習生は予約をとっていましたが、私は教習所長の特別のほからいで、突然行っても教習を受けることができました。実車教習では

所長が自ら指導してくれることが多く、教習期限の六ヶ月ぎりぎりまで合格し、普通免許証を取得しました。当時の教習料金は約二万三千元でした。私の月給は六万九〇〇〇円でした。

運転免許証を取得してからは茅ヶ崎市議会議員選挙の事前運動は自動車で活動しました。また、衆議院・参議院・県会議員・茅ヶ崎市長選などでも自動車を運転しました。市議会議員を四期十六年間で引退した後も地域活動、病院への通院、買い物などの度に運転してきました。

しかし、愛車の軽自動車も令和二年(二〇二〇)の九月に車検が切れたので廃車しました。バイクも同時に廃車しました。運転免許証も同年十二月で有効期限が切れたので更新しませんでした。運転歴は約五十二年で、人身事故は一回も起こさなかつたことを誇りに思っています。

自動車の代わりに電動アシスト自転車を購入し、近所での買い物や地区活動などに使っていますが、自動車とバイクでの活動範囲と比べると雲泥の差があります。自宅の庭に置かれていた自動車とバイクを業者に引き取って貰ったあと、庭は広々となりましたが、寂しさを感じます。しかし割り切って毎日元気に生活しています。

(二〇二一年十一月記)

### 茅ヶ崎郷土会の活動報告

#### 第二九八回 史跡・文化財めぐり

#### ―市内 中島の歴史を訪ねる―

山本俊雄

令和二年十月二十四日(土)実施 参加者一名

今年度初の史跡文化財めぐりです。コロナの影響で、市内でのみ二回実施としたその一回目です。

十七日(土)が実施日だったので、雨のため一週順延となり、その後も雨の日が続



き少し心配でしたが、実施した日は天候に恵まれました。駅北口のバス停に集合したのが小山さん、平野さん、熊澤さんと私の四人でしたので、順延の影響か、少ないナーアと思っていました。町田さんから事前勉強会には出られないから資料を取っておいて欲しい、と言われていたのに、姿を見かけないのが懸念でした。

中島バス停に着きますと人だかりを見て大いに安心しました。町田さんの顔も見えます。尾高さんの顔が見えません。早速、資料を配布し参加費を集めていますと熊澤さんが連絡してくれて、尾高さんは体調不良で欠席とのことでした。平野会長挨拶の後、いよいよ出発です。

まず、①「古相模川といかだま跡」です。産業道路と国道一号の交差点北側に、信隆寺との間を斜めに通っている小川と道路が見えます。これが「古相模川」跡で、南流して、交差する東海道(現一國)には何どき橋(今宿橋)が架かっていたこと、古相模川は今宿村では「筏川」と呼ばれ、このあたりの川幅が池のように広く、上流から流してきた筏を貯めていたと言われています。今は、東海道の南側から東に大きく蛇行する旧河道が線路跡のような空き地を作っているのが見えます。地図を見ながら説明したところで、平野会長が補足されました。守山牧場跡、サカタのタネ跡の話



江戸時代、相模川上流から運んだ筏(いかだ)を留めておいた川跡と伝えられている。



**中島の北側に広がる耕作地**

畑の中に点々と植えてあるのがマサキ  
畑の境をあらわしている

しになりますと、森さんがサカタのタネはうちのすぐ裏から東海道本線の線路までだった、と話されました。続いて一国を西に、②「東チヨウのサイノカミ」に向かいます。サイノカミ(道祖神)は国道沿いの北側にあり、双体立像で紀年銘は不明です。中島にある四チヨウ(町、丁)ナイの他のチヨウでは、本宿が明治十八年(一八八五) 銘の文字塔、二ツ谷が文政三年(一八二

〇)の双体立像、西チヨウが紀年銘不明の双体立像と明治一五年(一八八二)の文字塔です。東チヨウでは、立っている場所が狭い歩道のソバなので早々に北の畑地の方に向かいます。

③「小字の番屋と耕作地」。中島の集落の北側には広い畑が広がっています。所々に畑を区切る小さな木が植えられています。前田さん、杉山さんらに聞きますと、所有者毎に畑

を区切る目印のマサキとのこと。「この辺りは相模川の堆積作用で、耕作地は肥沃で野菜類の栽培が盛んである。また、「番屋」という小字になつており、洪水の時などに、増える相模川の水かさを見る所との話があつた。しかし村の出入り口に番人を置き、そこを番場という例もある。」と平野さんが話していました。

畑から西に向かい、一国そばにあるポンプ場を過ぎ、④「馬入の渡し場跡」

に向かいます。国道が付近より一段と高くなつていて、北側の土地は水はけが悪く水が溜まるので、ポンプ場を作り相模川に水を流していると、羽切さんが話してくれました。

それから渡し場跡に向かいます。今の一国と昔の東海道は重なつているため、渡し場はその延長上にあつたはず、と一国の馬入橋下を民有地の境まで行き、この先当たりが渡し場だったので



**国道一号に架かる  
馬入橋**

相模川の向こうが西で平塚市  
江戸時代の馬入の渡しはこの辺りだったようだ。



出ます。そこに中島を相模川の増水から護る堤防が南に延びています。堤防は少し小高い道路になり、ゴルフ場を含み中島をぐるりと囲んで中島中学の所に出ています。堤防を見ていると、鎮守の日枝神社で、宮総代の数田さんと鈴木さんが待ち合わせていると連絡が入り、先を急ぎました。⑥「領主山岡氏屋敷跡」と、⑦「殿道」では「ここがそうです」との説明だけで、⑧「日枝神

は、と見学します。ただ、相模川が西に動いてきたため茅ヶ崎市中島と平塚市馬入の境は、相模川の東岸、中島側にあります。『新編相模国風土記稿』には、江戸時代の渡し場は「馬入村―高座郡中島村間」とあるが、実際は「馬入村―馬入村間」ではないかと、と平野さんが強く繰り返されてきました。⑤ツ目の見学場所は「村を囲む堤防」。渡し跡から一國に架かる馬入橋の下を潜り、「ブドウ園」側に

社」に着きました。神社では、数田さんが次の様に説明して下さいました。

「大津市の日吉神社から分霊を請けた。祭神は大山咋命(おおやまくいのみこと)。大山は比叡山のこと、昨は山に打つ杭のことで地主の神との事。近江の山岡景長が徳川家康の家来となり、中島村を与えられ、慶安二年(一六四九)に鬼門除けとして山王権現を祀ったのが始まり。神号が現在の日枝神社になったのは明治二年のこと。前社殿は関東大震災で全壊し、大正十五年(一九二六)に再建されたが、さらに老朽化のため平成十二年十二月に新社殿を完成した。」

お詣りの後本殿内に入れて頂き、山岡景忠の名前が彫られているという扁額を見せていただきました。



その後、神社のすぐ横にある⑨「浄林寺」に寄りました。本堂裏手の墓地の最奥にある「板碑型供養塔」を見学、塔は上部に阿彌陀三尊種子が、銘には「元和九年（一六二二）癸亥年」とあり、中島の歴史資料では古いものに属します。

そこから殿道を北に進み、東海道本線の線路を越え、一国との間に、「稲荷元」と言われる神保家の屋敷の一角にある⑩「右近左近稲荷」に着きました。左近稲荷が相模川の氾濫で流された事から現在地に西稲荷が一つの社殿に祀られるまでの伝説があります。境内の石燈籠の年銘は「文久二年（一八六二）壬戌十二月吉日」とありました。また、稲荷元の神保家には、弘化三年（一八四六）二月、京都の伏見稲荷本宮が発行した分祀文書の写しがあるそうです。

以上で本日の巡りを終えてバス停に向かいました。

## 南湖二丁目の西運寺

### ご本尊の阿彌陀如来を拝む

平野文明

令和二年十二月十日午後、浄土宗、御霊山淨祥院西運寺を訪ねました。ご本尊の阿彌陀三尊を間近で拝むためです。山本会員から先にお願ひしてあったのでご住職の坂野さんが奥様と共に迎えてくださいました。私たちの一行は尾高、熊澤、小山、森、山本、平野の郷土会々員でした。



中央 阿彌陀如来坐像  
 向かって右側 観音菩薩立像  
 向かって左側 勢至菩薩立像



なぜこの阿弥陀様を訪ねたのかといいますが、今年十月から十一月まで、横浜にある県立歴史博物館で「相模川流域のみほとけ」という特別展が行われていました。その図録に、西運寺の阿弥陀如来坐像は「在地の仏師によって造られた像とみられる」(二二一頁)とありました。その根拠は書かれていなかったのですが、『茅

ヶ崎市史』3 考古・民俗編にもこの三尊像が次のように記されています。

その姿は平安時代の後半期に盛行した定朝様式(じょうちようようしき)そのままというべきものだが、衣文線に流麗さを欠き、鎌倉時代以後にあらわれる松葉型の衣文線(えもんせん)を併用しているし、上半身と下半身のバランスが悪く、全体に形式化しているのは時代のさがることを示している。江戸時代初期ころの作であろう。(中略) 両脇侍は完全な江戸時代の作。(二二二頁)

平安時代の定朝様式を踏襲しているが、作成されたのは江戸時代初期、といっているのです。『新編相模国風土記稿』の茅ヶ崎村の項に、西運寺は「慶長元年(一五九六)僧念蒼草創して一寺とす」とありますので、寺が創建された時に、ご本村も造られたのかもしれない。

市史の文章を執筆したのは、当時、東京国立博物館で彫刻室長をつとめて、市内に住まいしておられた故佐藤昭夫さんでした。『市史』3の刊行は昭和五十五年(一九八〇)で、もうそれから四十年が経ちますが、市史編纂のために市内各寺院の仏像彫刻の調査が本格的に行われました。

「江戸時代初期の作」、また「在地の仏師によって造られたのでは」については、今後も別の考え方が出るとは思いませんが、市内の仏像では古い方に属し、かつ定朝様式を踏まえているとすれば、茅ヶ崎郷土会としては是非とも押んでおきたいということが、今回、西運寺さんにお邪魔した理由です。

阿弥陀如来の三尊像は西運寺のご本尊として、本堂の奥、一段と高いところに座しておられました。阿弥陀様は坐像ですが、両

脇の観音菩薩と勢至菩薩は立ち姿で、共に両膝を少しかがめた来迎のスタイルです。『市史』の説明には、この両脇侍(きょうじ・わきじ)と阿弥陀様は造られた時代がずれているとあります。ご本尊は思っていたより小ぶりでしたが、引き締まった体躯が発する緊張感を私は感じました。上半身に比べて座した下半身が小さめで、これを佐藤昭夫さんは「バランスを欠く」と記したのだなと思いました。

本堂には法然上人と善導大師、地藏菩薩の立像も祭られています。ともに比較的最近に彩色されたようでした。

境内に別棟の観音堂があり、ご住職の案内でお堂にもあけて頂きました。観音様はお厨子の中に祭られた秘仏で、お開帳の日というものはないのだそうです。私たちの仲間のだれかが「コロナ禍が終結したらそのお祝いにお開帳されたいかがでしょう」と言っていました。

西運寺には、南郷力丸の供養塔とか徳本上人の石塔とか、寺の隣には義経をまつるといふ御霊神社などがありますが、この日私たちはご本尊の阿弥陀三尊から、深い感銘と十分な満足感を得て、コロナ禍が早く去るよう祈願してお寺を辞しました。

(二〇二〇年十二月十八日)

【これからの行事予定】 コロナ禍対策のために**会員限定**とします

○郷土歴史民俗勉強会 (Study room)

1月19日(火) 12時から うみかぜテラス2F—1

「市内 下寺尾の歴史を訪ねる 事前勉強会」

○第二九九回史跡文化財めぐり

2月27日(土) 午前中 市内 下寺尾の歴史を訪ねる

見学地(諏訪神社・白峰寺・陣屋跡・蔵屋敷・おもよ井戸・石仏・七堂伽藍跡・西方遺跡・高座郡衙跡など)

集合 午前8時50分、茅ヶ崎駅北口2番バス乗り場(湘南みずき行) 9時5分発。あるいは9時20分、バス停「湘南みずき」。解散は12時30分ころ同所バス停の予定。

○23ヶ村調査会

1月5日・2月2日・3月2日 いずれも火曜日 12時から14時。うみかぜテラスの予定です。

【148・9号正誤表】

4頁上段相州烏帽子岩図のキャプション及び下段12行「八折表」↓「八丁表」

8頁上段最後の行「同人あつた」↓「同人であつた」

14頁上段12行「中」トル

16頁下段4行「ぶら下げている」↓「ぶら下げている」

【編集後記】

「原稿お願いします」と叫んでいたら、「よし来た。ちよつと待ってて！」と手を挙げた会員が二人おられました。しかもそのお二人は九〇歳を超えた方でした。この一五〇号に載っています。どの文章かは言いません。探して下さい。いいなァ。そんな元氣、どこから出てくるのだろう。やっぱり積極性が違うのかな。七〇代、八〇代の皆さん、「飲まれる井戸の水は涸れない」といいますよ。ぶち当たらなきや。原稿下さい。

HP版は「茅ヶ崎郷土会」と検索すると見ることが出来ます。U

RLは <http://chikkyodokai.wp.xdomain.jp/> です。

ご意見ご感想を待っております。どうぞ平野(090-8173-8845)まで。